三
1

柏原中村氏正所蔵

蕉仙序

世集を撰する孤屋所坡刎牛らハ学問芭蕉の祈
り出しまゝ亀の窓をひらくと心の泉をくみきりく
ナ坊ちりをの丈字の部風をたけこあくゝ学也 著
作りをこの〳〵ゆきまやる歌らの二三るゝ侍て
失物より蕉を尋ぬる養をれよ是にはゆ
宋人の石亀らすいへらさんこきのあ著
し嬉のまやゝるを堅よをゝ様ゝをゝて

金序の社乃古坊を蕉と去りまらひいつく
春乃とらの月入りくをうてゝうのゝ寄乃め
ゝしの是ゝ説のまりもまゝるゝやゝれを心ひゝ二はの
日乃ゝつゝ出りまゝ秋乃月ゝゝらかゝ和学ゝ
や吟流り篇らりて竟よゝけまちの二まをゝ
ウのつゝゝをひゝゝみるゝ有色の秋をあやゝう
おゝむれゝゝ文くわゝく蕉の篇みゝゝりゝゝゝを
詩をゝかゝ白侍ゝ詩の心義ゝいゝ五川のゝゝ

ゆるハやまとの国ひとハなれど例の品に
任せるもあるすゑ霜とりあつめ市ゐる
ゆゑ日芭蕉翁の首途よりけりっをと携て
西行の詠を写りけ此ホの集の下に入てあるを
翁の秋ふり出の句に西行の歌の
年をうちまつ[illegible]と云ハ誤也
今ハ社ならるを小ふゆをりてとしまれ
うちしゆ世ゑを[illegible]句様に成よりこの心りて

写しをかしとも拾てわれ今此ゑを
うかへ其初を[illegible]頭号をつけ[illegible]
ゆるしを年をつくる拾ハ[illegible]
ゆくし

元孫七の達長間さつき初三乃日素行

誹諧炭俵集上巻

芭蕉

むらうにの つと日乃出白山流るる　野坡

ふるくより雑こ乃帰る花　仝

歳暮諸を去のてまきとふ分て　芭蕉

上乃毛ゆ雪乃内はらくごせ　仝

義経まるれあるのはるゝ　野坡

ウ　内乃へ兼もらさいわくは　野坡

姫を望う人あはかぬ　芭蕉

ちふらうようひおなしつる紬(ちゅうこと)　野坡

うゝを面元ふくめ　芭蕉

頭ゆ乃みうゝ乃ゆ乃ゆ　野坡

ゆとい乃ゆ乃ゆ　芭蕉

鶯乃花乃ゆを抱く事ゆ　野坡

うえにやれうゝ乃　芭蕉

もつて夫無下地蓑て見ん　野坡
家を出て見る人なしぬる夜
明方清らと酔て寒乃旅　芭蕉
門て狩流し　壬生寺念仏　野坡
東風に従蓑笠いれと吹すて　芭蕉
重みをまして脇わけらゐ　全
江戸者花出むる新亭を宗れて　野坡
くせに従ふいれどうら田をうす　芭蕉
方しらず中蕎麦屋門のよ枝葉ある　野坡
相者未言く月はいるし　芭蕉
門ふめて雨まつて有る河内は　野坡
ちらふく金て素ら〳〵茅　芭蕉
もつ手ず世房乃おやと振舞て　芭蕉
丸と乃ちる葉ある　演女　雪人　野坡
結乃河流を送る茅ちゐ　芭蕉
なよハを乃わて書表乃出来　野坡

ゞ
ご茶碗も東乃方ヲ窓をあけ　野坡
笑ヲ咲なくたまの　雛ゝ　芭蕉
ゑ京　嘯一あしを寒うなれ　野坡
未金茶高乃ちてゝ　毎月　芭蕉
陰へ茶知らせず嫁をつまゝ　野坡
琴風乃陰ヲ　みゑうゝ　芭蕉

三吟

寅好きの延徴くれ影ふ一ふ　嵐雪

あさみや苔うす雀鳴きぬ　利牛

けさ見せや乗乃小坂若うしまの　野坡

かをばすくく園の花撲場　嵐雪

面くと翻日ふ乗乃雪若春　利牛

又後きの咲ん後生に出る　野坡

沼深を寒ふ流れ乃ぞ流れ　嵐雪

あちこちに流れを蛍若うつ　利牛

陽ふ若と蛾を咲年来流　野坡

てうくしもも来るういわわ　嵐雪

思谷乃ちちを異詩　利牛

乙百のうを二度元ふわ　野坡

湘めき乃いぶ若詩歩雪ふ　嵐雪

人ふきわうぬ杉思むく　利牛

[illegible]

野坡

嵐雪

利牛

野坡

[illegible]

利牛

野坡

嵐雪

[illegible]

利牛

野坡

嵐雪

[illegible]

利牛

野坡

嵐雪

[illegible]

利牛

野坡

嵐雪

[illegible]

利牛

野坡

ウ 霊ちうつてみせたまふ大しめ縄　嵐雪

ちはやぶるゆふの神垣　利牛

稲倉乃波きのもたゝきをしる　野坡

うしと雲ぬ雨引　嵐雪

桂あるる世をぬくめて雪の法　利牛

ちうちうの月乃降　野坡

あつ川を
まのあたり
見る思ひ
あらたなり　川
　　芭蕉

夏草や
兵どもが
夢の跡
　　孤屋

五月雨の
降のこして
大井川
　　岱水

あやめ
葺
家
　　利牛

五月雨
降
日
　　芭蕉

あやめ
葺
家
　　孤屋

ウ
ものしれる
者の下まわりして
見
仕事
工夫
　　利牛

姉
をよい
妻
　　岱水

俳
都
　　孤屋

風
雨
　　芭蕉

家
の
　　岱水

雖
汁
　　利牛

茶
　　芭蕉

茶
　　孤屋

こゝろはこうやら茶屋娘なら
うれしく杯をあらためて
雪乃江はそうしあるの勝自
ふしぎもなくしもの乃おもひ出ら
若不屋なる淀とも中乃わるさなら
そつちはなをとゝへあくのうれ
淀市ゝ出りうに出来ぬ所ゝ
墨水にまつしらかゝを見てある

利牛
貸水
孤屋
芭蕉
貸水
利牛
芭蕉
孤屋

若ゝまんてねまを淀ゝ
ゝを医りく杯ゝ烟臺
今乃まゝ雪乃屋ゝを杯てみる
まゝ貢ゝとゝ寄れゝ久れ
息ゝ紙文乃さぶ乃めてゝ淀よ
堪忍なゝ七文乃無ゝ
ゝ自ゝまゝ今を殺ゝ烟
ゝてゝ荷物ゝ孤

利牛
貸水
孤屋
芭蕉
貸水
利牛
芭蕉
孤屋

[illegible]　利牛

山乃根深き西のしらすゝき　貸水

よこ雲にうすし風乃吹あれ　孤屋

脚乃上手　[illegible]　利牛

[illegible]　芭蕉

金乃[illegible]作蓋[illegible]　貸水

芭蕉

孤屋

貸水

利牛

各九句

百韻

五月雨の深夜をてらせ月の光　利牛
岩間の苔に水の音かな　野坡
面影の不殊数年を隔てて　孤屋
夕月の明るに鶏の鳴　利牛
竿竹に葉の紅葉ちらせる　野坡
夏の雨人あり　孤屋

雲乃月千年の嵐汁ぬくし　利牛
掃き捨てうら　野坡
ぐわんの中てしわ出たるほあつ　孤屋
埃もなまれどやうれに手に　利牛
松坂や名川へいたれる面白　野坡
吟も勝てつるき関の面　孤屋
十二三弁乃衣笠乃おうらひ　利牛
本業はうるさるとうし　野坡

日乃あるる方と成むけ乃と　孤屋
共寿麿はよりはまく　利牛
迫江路乃うるるを　野坡
天うるの　相ようるの　身乃迫　孤屋
生（イキ）なるる　雪乃　西ひるこ　淡　利牛
様乃　寒　蔦乃　野坡
年寿乃　蔦乃　連ゑ　孤屋
此　影　佐　乃　人　ゑ　て　利牛

ほかとと二日　癸乃い　出　野坡
ほうるとと　ほへ　ゑ　孤屋
ない袖を振て　みまも　利牛
寒　羽乃　糸　も　野坡
ほくゑ　ゑ　孤屋
尚　ふ乃　ふ　今　大旱（ヒデリ）　利牛
切蠟（ロウ）乃　啖　倒　野坡
くゑ　納　ゑ　仕　西　庵　孤屋

癡男をすぐしうまも結ぶこころ　利牛
為てまけたる乃結乃重ねき　野坡
つまあれ乃名をいやしく乃呼まち　孤屋
と為わ乃裏ゆ蓋き井乃本　利牛
ゆれ乃有横ゆ貧乃去性　野坡
すいき乃先ゆ乃あまこつて　孤屋
二ウ乃つるゆと魚を通ふ乃浦出る　利牛
ゆてうる乃乃風乃乃家　野坡

代遠ゆ相と捨乃まを為て　孤屋
赤い小文ゆを歩くこころ内　利牛
淡を宿ゆ男乃節をうえ　野坡
師を比丘乃風乃をはよ　孤屋
俳諧乃印を重ね賞うして　利牛
天一流ゆ姿をみられうち　野坡
唐袖をうたつる船乃者　孤屋
もく紀行て乃乃見者　利牛

燈を風に吹消されて
中四五町の所わけ
自然とかき消ぬ塚の辺なれ
清水庵 俳諸 風 物
二 物語紙ういこを庭に紙
小夜ふかう
物語に時を新
物語に時を出
物語に時を入て

野坡
孤屋
利牛
孤屋
野坡
利牛
孤屋
野坡

素柳の蕉地に流る傍余 抗
賣ものもて手数 茅

利牛
孤屋
野坡
利牛
孤屋
野坡
利牛
孤屋

物語もて物なれ入て
又此庵 古
故ちにうつに
ふ
蕉
蕉
蕉
蕉
蕉
蕉
蕉
蕉
一つ

紙ばかりに荒引ちらす紙乃内　野坡
大まあまいうる素乃俳諧ハ　利牛
三ウめを殺して　こをぼれ乃ちらす賜の麦　孤屋
又大のみして　法たとわ　さく　野坡
かく仕ぶ中　素乃色乃色　まつる　利牛
入ぶ人　味　豆を出し　孤屋
すちうれに木綿　袷乃新田川　野坡
ハ茶ハ乃みを　富乃ハつを　利牛

ほやしと云どほうる　ぶ　孤屋
乃麦　綿　野坡
素乃田引　桜　利牛
風情　ほうる　孤屋
ぶちうる　野坡
入　て　乃　云　利牛
桃　ハ　孤屋
方　つの　何　野坡

名
大ふの乃あぐ仁知の砂乃えて　利牛
行年を　抗しきぬ板の末　孤屋
義を仁ら日心乃あるる跡　野坡
九月十り　濁仁我　わかれふ　利牛
板井も　さるる　立きたかつくし　孤屋
之ゑし　春餐　ゆる　偽仁集る　野坡
里餐を　喰れ　ら乃ぶつかも　利牛
やるうもの　を　嫁乃　縁ゆと　孤屋

童仁ふる　翁ら　の　雑を第　野坡
うんち　果ふ　ハ　ち乃　を　利牛
丁一亭仁　仙　儀乃ふうわ　孤屋
行行の　濁て　出　ま仁なる　野坡
夕月仁　春　を　ふるものを　利牛
色て　座て　鉄乃　やきもの　孤屋
名ウ
宝　を　今年　風よ　野坡
もそや　仕ふ　も　なるあとろ　利牛

孫屋

野坡

利牛

孤屋

野坡

牧童

春之部發句

立春

蓬莱尺笑そや伊勢芋和俊　芭蕉

春もきやせまいうちから　松　溜子

みちのく元々の雪　新人笑の海老　松風

春や祝ふ無波見ゆる　支　去来

万代の春　祝平　正意

いろうしきをを養乃かきそめ　大坂　洒堂

冷つそや木芽乃たるの粉和　雀水

移いまま門流れのの名残り　沾圃

関下伝も中ゝ名や年賀宝　孤屋

初夕新元菜とつまもそや　利牛

長松ゝう親乃為て来る出乃雲　野坡

梅

[illegible] 露沾

[illegible] 豊春

[illegible] 支考

[illegible] 伊賀 土芳

[illegible] 利牛

[illegible] 游刀

[illegible] 野坡

[illegible] 杉風

[illegible] 青羽

[illegible] 野坡

[illegible] 仙杖

法華乃会ニ
勝身一生ニ
大乗や 妹乃出て
おなじ身ぞ 仏花

浪門乃長ゆ

ちゐ国はや 二葉乃松ちも 打牛
十五ゆ 月乃出る 大坂 之夏

猶乃遠 初ふ 乃 野坡
ねこ 乃 ん つ ほ れ 加 芭蕉

雪

うゑ ゆ ふ と 忘 る 嵐雪
雪 に 茶 し 又 乃 文 其角
う ゑ ゆ 乃 ち 切 蕉 系 桃溪

うゑしやゆめを考へて夏鼓　野坡

笠ゆゑ一つ金を入るゝ　利牛

柳

こねかへるもつらしや柳　湖春

落るごし月乃大きひうれ柳　嘉秋

白人ゆゑうゑたる柳　野坡

せきまいの乃尾ゆゑ見付る柳　一風

町大ゆゑ寺ゆゑ剛ゆゑ柳　利牛

傘に柳わかみゆる柳　芭蕉

椿

土ゆゑ如籬ゆゑ椿　孤屋

枝ゆゑ伐ゆゑ椿　湖元

金入て冬ゆゑ椿　曲翠

[illegible]　嵐雪

[illegible]　支考

[illegible]　野坡

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]　芭蕉

[illegible]　松風

[illegible]　丈艸

[illegible]

[illegible]　素堂

[illegible]　去來

[illegible]　孤屋

あまとを　あんのうの　宵の月　　刑口
たゝれても　みのうしいきうのうの　　新歳
柿の葉の　色のすわ　さるや　春の雨　　山技
枯冊さく　人もや　あんさのう　　湖春
あとたわと　あるり　五戒の　柳　　其角
あるとよも　毛虫たく　やめ　柳　　元雪
やまうちや　小川の　うの　車　　大津　智月
老　仏も　蛍　うつきうの　あんの　　大阪　之房

祇南
柳の緑井　蓼全
利牛
全
孤屋
孫陵
全

祇南　あるうあるの　強　敷　うの　毛　さう
山　柳　小川　花　こ　ひ　おなど　の
昆布だし　や　あるよ　ふまの　つく　庶　素堂
おちつき　毛　の　実　や　ま　毛　や　柳　うあ
杉　人　う　柳　て　ふく　や　蛍　の
ふふ　ま　て　あう　ふ　ひ　ふく　て　あん　の
食　の　附　み　み　ま　つ　ま　や　ら　ま　う

上巳

[illegible]川乃大内くし[illegible]千代　法法

[illegible]毎年[illegible]もこの桃乃[illegible]　桃園

[illegible]つくき乃外[illegible]いつまでの雛　長角

[illegible]乃[illegible]時を[illegible]もひの[illegible]外　この如仆

[illegible]日半酒を[illegible]て[illegible]も桃の[illegible]　[illegible]

[illegible]庭乃[illegible]毎年[illegible]桃乃[illegible]　新年

[illegible]歌仙や[illegible]乃[illegible]乃[illegible]　[illegible]屋

[illegible]乃沼[illegible]千[illegible]　芭蕉

[illegible]くられ

[illegible]つ年金[illegible]むかしの外　[illegible]城田夫乃有

[illegible]も[illegible]乃巣つ[illegible]乃[illegible]乃濡　芭蕉

[illegible]の藻や[illegible]　[illegible]

[illegible]と[illegible]猪門乃つ[illegible]外　[illegible]

ものりやけりて 恨や 風乃末　伊賀人 猿雖

ちぎれよきもちの葉乃茂乃 嵐乃音　仙華

結りて

結ぶ 恨乃 恨乃 恨乃 恨乃 恨乃 恨乃 恨乃 恨乃　野坡

七集のまこと宇大内乃孤屋新五

ものの名たゝ和川まもみこわし

雲ゝ家 いこと よりも 恨乃 恨乃 恨乃 恨乃　野坡

鶴ものすゝ月ものあるこわ　利卜

夏部之發句

首夏

はつ夏乃素波ほし衣之　嵐雪

衣うへナりさやく風乃ゆ　野坡

鶯をぬく指ぬいせりし衣更　九節

雀ゆわやはき袋や衣うへ　雪芝

衣乃袖ひさんよりの花ちる　子珊

南部乃時　麦白し衣之　利牛

う乃花

郭公やとき杖ゐ及ぶ　芭蕉

う乃花の袖乃ぬし之関の門　去来

郭公

う乃花に芦毛のうまあ物　許六

卯月のはじめ　文考

[illegible]　湖春

[illegible]　素堂

[illegible]　芭蕉

郭公

[illegible]　柳葉

[illegible]　其角

[illegible]　嵐雪

[illegible]　杉風

[illegible]　芭蕉

[illegible]　素龍

吟雪嶺しら風ふかるる　利牛

ふる雨の乃出されぬ格子哉　野坡

麦

栫ちに麦穂いやしや化ぐり　あ蕉口

麦乃穂と生ふるそや雨はれ山　千川

麦畑ふる田種や巨き蛍とよ　許六

ちりを川はきまとて

月とみし麦乃白ちや冠ふる内　利牛

麦畑や出めりても狂麦乃中　野坡

麦畑や出めりしふるを

雨風ぬ出ふうう縄乃ふるきも　盛水

御午

六月の中や傘に付る小人哉　春角

さうぬ多くみそや持きの風の色　大坂　洒堂

五いとしみすみ入あやめ糸　桃隣

乙も大なく口上もなし　粽あれ　嵐雪

みをのやもく着乃宵ゝ甲なる　仙花

帳ゑ見とめぶ多る殺家　素秋

夏旅

黄杜をみうゝ町乃あ川ほ糸　自言

杜柴ゝ屋白あ　芝乃素　釋扉

二三ゝ　影も　時も　ほ引　参　嵩町

そげ山乃力及ゝ　ぬ　ほ糸　孫雖

ゝゝ地や　ゝ　ほ　芝　白ゝ　芭蕉

ゝゝハゝゝの

五月雨

[illegible]へ[illegible]　主系龍

[illegible]と川　大和川　桃隣

[illegible]　野坡

[illegible]　嵐蘭

[illegible]　岱水

涼

[illegible]　芭蕉

[illegible]　[illegible]

[illegible]　卯七

[illegible]　探芝

[illegible]　智月

[illegible]　元峯

玄来

野坡

素堂

杉風

正秀

星布

嵐雪

詩云

智月

小銀

七列

丈竹

仙花

一いとれ螢もうちてわかるるを　楚永

うちうち吹うちうちすまのくるを　この　殘香

猪乃二月にうり市うち　茅てような　さう　乃有

国貴侍所乃　あつまいうなよ　出風

けうとよもち鶯見振也平の家　祐甫

一枝もすけなる丈竹見わうえ小　仙花

竹うんのや児見　蓋くうてうらつ　嵐雪

うまへ人　佐うゐをたしもうを

うし神あのれて汲せしむうた

あうれをうを紅てあうき

あうれなうをかあうをれあて

ううしせうれえ行をうきて

汲て酒可名うつあ川ふ　利牛

あう人のふ堅くいたなうれ書

ナ和てみよしこと久つう

ふ見うをなあ出して

行中をねてあてみうや　方　庭先　野坡

和合年村氏巳月藏

誹諧発句下巻

秋之部

秋のはつれいつれの中より月を数て此俳の事をえらぶ

名月

明月や見つくもるまの数てきて　湖春

名月や猿一取よ八ツ　泰の鳥　去来

家賃てこそ知る月見哉　荷兮

名月や俗世紀す世の姓　酒堂

松陰や蝶の姿の月の見　里東

ちらすの移のらくたよ多の月　利牛

ふこらつまてもこそ　ほの月　去角

むさしの仲秋の月ちめて

人行くし　望峯不書句此世と

山月やふこみゆくと　ちらす町　玉洲

七夕

無のうふ牧仁ゆ[illegible]もうへ　寒角

[illegible]　めせかやの御　弧屋

七夕やありうしうあまの川　[illegible]

垂考集豆

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

朝点

[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

秋虫

まれ之来ハ〳〵しりきりくす　大津 杏月

咄ふ人のとまれやきりし寸　丈竹

蟷螂のわれて落るやめくる所　きり 為有

こほろきや鎧て出やる窓の上　紙鳶

鹿

小鹿の鳴しを見られ小屋哉　車来

人のあはれあまりて

鹿のふむ沢や硯の折垣紙　為秋

鹿のふむ

色照や見れずさ〳〵鹿の声　杏十斎

草茅

[illegible]の[illegible]の[illegible]の[illegible]　柳流

[illegible]　邦童

[illegible]の[illegible]　張稲

[illegible]　[illegible]

[illegible]の[illegible]の[illegible]

山中の草[illegible]

草[illegible]の[illegible]　[illegible]

閑[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　柳流

秋 [illegible]

行年の[illegible]をゝもの[illegible]　行牛

[illegible]葉や[illegible]の甲　[illegible]

[illegible]や[illegible]の[illegible]　未紀

[illegible]て[illegible]の桃　[illegible]

[illegible]の名を[illegible]と[illegible]

[illegible]世[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

六條のつまあらしのひけとゞめある
ことのやう〳〵何を記念のくらゝ
あはきるゝんりハくれなしおもひも
大方八ちう紙つの絵のよみものかね
しつめてひんれ将のなとうつて
みきゝるとあり小倉山葉のとき
ふて見出されむかしハやたゞ豆腐
の山の里のくさとみちもとに筆ある
の頂上とありくハいつとあまた人の地
ありての伝きりみちのうちの
小童りこう収一あまれてるんちゃ

まつくとひろみありしを名
やしなりわといへしいやしからぬこと
をあるすぢしいまハもの人くも此
世をさりつれそいよし書をもよみ
いろすらくまあもみすへしことを　也存
とそ云ふ

石青亭

吹きしねこきや
庭うらし

那枝

[illegible]

九種元うゑ物や秋のうゑ物　[illegible]

水田ゑのゑや春山ゑの紅　[illegible]

[illegible]　西堂

秋のくれいよ〳〵うゑ[illegible]　[illegible]

[illegible]黄葉も見ハ年[illegible]　[illegible]

又点のけハ秋[illegible]る[illegible]　[illegible]

[illegible]ハ風[illegible]ても[illegible]　如秋

秋[illegible]ハ煙や[illegible]ふ[illegible]他の上　伝伝

庵丁の片秋[illegible]月の雲　[illegible]

冬之部

初冬

風や神ずさいさいのうれ　其角

市中や木の葉も落すあれ　桃隣

冬枯の秋よりとはら引　芭蕉

掘ぬや荒弦よりて冬うつく　太祇

板の葉のまれ〻やかれ東　御岳

刈菊の紅のあるもまぬ引　初美

風の菊ゝとしまき小ぶ　物之

外ぶ菊や掃のもも立　嘉木

田や時しらぬ稲の面　八雲

ゆゑ山うつて

末枯の枯ぬ仕度　桃隣

第四ゝ菊の最後のさむさ引　湖月

時雨

[illegible]の後へらしうみぬ　[illegible]

[illegible]の中の[illegible]のりうん　芭蕉

芭蕉

竹の葉[illegible]

[illegible]ぬ[illegible]人[illegible]ハ[illegible]ぬ[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]うん

小[illegible]雲[illegible]の[illegible]を[illegible]ぬ　芭蕉

大根引

[illegible]と[illegible]小[illegible]を[illegible]や　大根引　芭蕉

[illegible]ぬ[illegible]ん[illegible]大根引　芭蕉

[illegible]の　大根　[illegible]

はむさとなる夜
月
見て

人もの思ふ心なる時は
なにを先物思はされ　永悟
なほ切なる時はもろさに　利牛

そのもとをたづねてなしその月　秋有
実流れ出づるちよとその月　里集

太のこらをもとめ川の水へ
もとうれし比はあり水の
うしよりとをつとをくく
なほうるはしく

雪

さゝなみこちらを彩て美濃路
和雪の見やまの梟さら
さら雪や濃の嶺の峯の上
雪のりく雪傍て鯨彩て
雪のりやうまやうまの
その花波をさらして

雪の雪雪彩の雪
雪の彩や仏みへわりの雪の
さら雪やさらやう濃うもる
炭雪の指町さる雪吹
濃山の雪帰る雪負
江の雪や曲雪ツイ

題不知

かるしさの猶くれ行秋の空　素堂人　呂丸

ちとせ迄や物猶の秋の程　老道

後門の菊を送みつゝ起ふす　作云

此火燒のくもゝ　ちるゝ　舟月

ちうとのちりしらるゝ　ゝ　ゝ

猶の方やあつさ方の五古　丈

度中やちるゝ大鶴の　ゝ　秋房

作と作ゝ

秋雨　ゝ　神　乘　芭蕉

ゆへ降ゝ　ゝ　ゝ　作の　ゝ　仝

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

歳暮

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

老蘇うの手うれのう
いそとを長うる市上

秋風て心やはらぬ　蕉心

ものをよくへとうるゝ物ゝ　蕉

諷誦秋之部

秋のうち月上の枝手新月

ふくれて一羽 仏わらの雲 琳

多雪又日仏 物ら奥吟て 仝

月の仏し 仏廊の門 其角

拙文うるの方物を義よるし 仝

てひるとハ九そうそうそう 琳

下京ハ字仏の蔓和さうれて 仝

物色の寒さ 裏ものしよ 其角

色恒のふもして 九四下ゆ 琳

色吹うます 春乳の 其角

四の呼よ 右把て 物ら主 琳

色色のさむ 猫の美 其角

り地の前 ぎ物ら物ら物ら 琳

新よ初まて ら ら ら 九の月 其角

羅綾り　鏡のさびはとてぬくし　孤屋
扇のなかへ　絵手つおかへし　芭蕉
善光の梅は　桂の香すみなり　孤屋
むかしのをとめをとめせて居　利牛
いさ心おもき今のつれなる　仝
年の緒のながらしき　他　孤屋
夜ゝまのふとまうし　咲てやつれ参　利牛
あがりといふて　小諸　いやよ　孤屋

朝の露　寄桂の樹も落ちて　利牛
葺こきそうして　風をとまり　孤屋
見まねさるゝ　沢水の花とぬり　利牛
蝉と蛙との　行脚ける　気　孤屋
年頭へ　吉のごとくる　秋の夜　利牛
此たわ流れ　月の雲　行き　孤屋
織燭して　見て来た雨の跡　利牛
与添るしまし　嫁て　ぞく　雑き　孤屋

各ウ

小夏清水所之言世て云ふ　其角

あもの中ふ清水の下ね　孤屋

秋風を聞くやうに

流へのうらみ

今宮の東陵寺にて

詠りぬ

天野氏興行

道くだり拾ひあつめて案山子かな　桃隣

どんどと水の落る秋風　野坡

入月に夜はほんのりと打明て　利牛

塀の外まで桐のひろがる　桃隣

銅壺よりなまぬる汲んでつかふて　野坡

つよふ降たる雨のふりやむ　利牛

瓜の蔓ちらぬ人がまつてくる　桃隣

追つゝ夜ふかれど長谷をまてこぬ　野坡

まわく者常住物あまりし　利牛

いつかはい十月のそら　桃隣

居木の上ハ蒸盤てまきたて　野坡

ふらしらうとし嫁の仕合　利牛

えんなりと御上に保あらうえ　桃隣

錦なさわりくゝ久月　野坡

けふハす念仏きこゆる夜の内　利牛
野ハつゑりきてあらし　桃隣
人の物負ねば楽な命なる　野坡
おえや孫まし上ゑり南所　利牛
上手の棒よ出物ハ皆古し　桃隣
むかしの小ころしれと見え色に　野坡
寛也さ着て男新（ダイ）かしましし　利牛
昨かりしきりの塩さハつて　桃隣

七夜の葉をきしし秋の暮　野坡
秋の末まけ月をくらし　利牛
はし子者の嗤しのあくすて　桃隣
きさめれて又薪（ニキ）紛風不結　野坡
よいやまハ寄まへ出（サン）をさまてみる　利牛
走りしんこれハあそぶめ　高と　桃隣
椎ヲとらんそなゑ思をよて　野坡
京をあつまり出ちらし　会入　利牛

名

燒物し給へる冠四郎

孤隆

陽を望人て今らもゆてくる

行年

髮ゝおちて雪踏ぶすまゝ心あまて

生徒

芝神をてもゆる入あ

孤影

仰て天茅ゝすまゝもあの

行年

ちりゝとしのゝ手ゝ閑を

生徒

水上月を
宮の川にて百興　芭蕉

桜葉の厚くなりし夏屋
陰にハやすき涼風哉　少仙

安産の祝の小豆を引うて
孫屋

月を今宵月をみる家
行年

松ぬの陰を経て来ぬ風
少仙

新木の香き小の家家
芭蕉

綱の者をつきふせて
をきく　こと　八ッ
いさきハ平軍の大きも
芭蕉

淡海の夏　新後も　とぬ
少仙

吹もむ氣桜舟を吹消て
孫屋

唐土癖又ちる花の音葉
行年

上をまの干葉刻もうの夜
少仙

ちる出ぬ日を用て　立ち
芭蕉

縮雲のとつはをるつれて　利牛
塚ホ門あるる　みやゝ石元　孤屋
比路の俳窓もるを秋月　芭蕉
秋の月　勝のうつる　年　少陸
郭公の蕎もおちて　ものの上　孤屋
吹こらんる　笠ゐよ　利牛
川鵜の苦しのもをあ　少陸
手地のうのうすき　芭蕉

于地と日向の方へいきせて　利牛
塚出す蛙の花（ツト）　孤屋
美月よ浮世ゐ　芭蕉
みかたるよ　語（ヨコ）　少陸
ゐゐと大海ゐ　孤屋
きのさのむ林の　利牛
中ゐて俳窓の　少陸
壁をしゐ　芭蕉

ウ

風吹て秋の野の毫さらす　利牛

紅の野を染てゆく　孤屋

ちるほどを木の揚場の月寒　芭蕉

見送るいのつまのもちこやく　少仙

ごこもうも赤のこ舟中野　孤屋

鵜飼のちりをそらぬ風　利牛

芭蕉

野波

孤屋

利牛

各九日

雲の松みまと口みまと労宣し

日の光りよりへの赤きそらて　所風

だ者を一ふ信ふ手明く　菅直

ちつくさとさ大名の作　子海

ゆえあらぬもふハく為有和　地鄰

雲をうれてひろき高紀　利中

ウ

紅谷の花まれる秋の夕　貴水

笑うらうて紅色夕　歩使

二三夜て赤おもあ門の稲　子海

るの夕　ー地のさ干りの　北國

竹の皮を紅ふ夕のまて　石亀

移ふ夕のうれ夕のうて　移風

ふふ夕の天人も夜仏の秋　歩使

ゆうすのそやうを　利会

さくの月をかこちて稲もち　依之
背中へのかゝる尻をうらやむる　桃隣
菜むしろのまハつてとまるうかれ　子珊
川ばたに小鮒いる　石菊
名
名月にえれてうき網の笹　杉風
番戸へ早苗山へ行みち　岱水
あこひかし寄くと読うる　孤屋
え集めて八ツ時精進日　素龍

昨菓包捨て俵へ入るゝこみ　桃鄰
かざしわとて葉代のれ　依之
名月てうしろをにまかろし　沾圃
ころりへおりて火をかけて来る　子珊
又けさも仏の食てに明　利牛
掛ちかわして野ゞこぼれし　杉風
大坂の人にまじる名の月　利合
隠居をこまんれ和毎の家に入　野坡

もちあるく汁常の節のさけくるあ　子珊
次の小部屋でつまむ責る　利牛
鋳掛よこしみて居れハ吟(?)ハ　曽良
七つのかね年寄嫁はまる　杉風
春の日あしらは内より引出して　桃隣
男もしらず花をさゆる　岱水

杉風　五
孤屋　二
芭蕉　一
子珊　五
桃隣　四
利牛　三
岱水　三

野坡　三
沾圃　二
名菓　二
利合　二
信之　二
曽良　二

撰者芭蕉門人

志摩氏　野坡

小泉氏　孤屋

池田氏　利牛

元禄七歳次甲戌

六月廿八日

誹諧炭俵下巻終

京寺町通　井筒屋　庄兵衛
江戸白銀丁　大十屋　藤助

伊勢二見の浦の名所にて
流れてもうらぶれ　梅業の神　武太神　家隆卿
三柏の神事

年代を経長月の流れとて陽梅に　こすず迎る

續太平記

尊氏三代孫義滿公天下初太平治
石清水工御参詣

頼ムカ十　我源ヲ石清水十カレノ本子ヲ神ニ二カセテ
濃州本巣ノ郡ヨリ酒泉湧出ヲ　此ヲ
養老ノ水ト號ス　此心ヲ
盡セジヤ君ニ引ル、玉水ノ上清時ハ下ハ濁ラズ